乱歩が愛した十七代目中村勘三郎

後藤隆基

幼少期から歌舞伎にふれていた江戸川乱歩は、昭和初め、ひとりの女形に心を奪われた。三代目中村米吉。のちの十七代目中村勘三郎である。

乱歩はしばしば勘三郎について書いており、とくに「勘三郎に惚れた話」（『幕間』一九五一年八月）は、二人の関係を知る上で必読の一篇である。

「今から二十数年前、京都の南座で、たしか菊吉合同の顔見世芝居を見たことがある。〔略〕十六、七歳の勘三郎君（当時、米吉）の扮した少女の役が今も忘れられない」

一九二五年二月、京都の南座で『時今也桔梗旗挙』がかかり、初代中村吉右衛門の武智光秀に対し、十六歳の米吉が妹桔梗を演じていた。乱歩が観たのは、この舞台ではなかったか。

「当時の彼は芸がうまかったとは云えないであろう。ただその姿が可憐で美しかったのである。私は心から女に惚れた経験のない男だが、あの米吉の少女には夢中になった。もしこれが本当の女なら、真実惚れられると思った」

一九二九年十月、米吉は四代目中村もしほを襲名。昨年、松濤美術館「装いの力――異性装の日本史」で、橘小夢が描いたもしほ時代の木版画（一九三五年、弥生美術館蔵）をみたが、乱歩が魅了されたのもわかる気がする。

戦時下に乱歩の足はやや歌舞伎から遠のくようだが、戦後劇場通いを再開する。一九四九年二月の『油地獄』（三越劇場）の河内屋与兵衛に接して「二十数年前には彼の可憐な姿に惚れたのだが、今度は彼の芸に惚れた」と、以前の印象が一新されたようだ。そして一九五〇年一月の十七代目勘三郎襲名以降、種々の役にあらわれる芸と貫録に乱歩は一層惹かれていく。

そんな乱歩があこがれの役者と初対面するのは、勘三郎襲名の年と思われる。翻訳家で『空の大怪獣 ラドン』（一九五六年公開）の原作者としても有名な黒沼健の夫人、登久の仲介で初めて楽屋を訪問し、その晩たちまち意気投合。生涯にわたる交誼を結ぶ。

きっかけをつくった黒沼家は鎌倉に住まい、勘三郎家は一時その隣人であった。当センターには、乱歩夫妻、勘三郎夫妻、黒沼夫妻が寄書をした色紙がある（RD9-2-2）。鎌倉長谷の華正楼で一九五二年に会食した際のもので、勘三郎の名の脇には茄子の絵。安田靫彦画「三なすび」の軸を気に入った勘三郎が、それを真似て色紙によく茄子を描いたという（山川静夫『勘三郎の天気』読売新聞社、一九八八年）。

また、乱歩は戦前から文士劇を上演しており、日本文藝家協会創立五周年記念の「故菊池寛氏追慕の夕」（新橋演舞場、一九五一年十一月十七日）では『鈴ヶ森』の幡随院長兵衛を演じた。白井権八は久保田万太郎。このとき二代目市川猿之助が指導にあたったが、乱歩は池之端の待合茶屋を借りきって個人的に勘三郎らの教えを乞うた。探偵作家クラブと捕物作家クラブ共催の「黒岩涙香三十三周年記念祭」（三越劇場、一九五四年四月十五日）の文士劇では、勘三郎が全体指導を担当。乱歩は『天衣紛上野初花』で河内山宗俊を演じて風格をみせた。

こうした二人の交流の一端をつたえるのが、雑誌『花道』一九五三年五月号に掲載された乱歩と勘三郎の「手紙往来」なる企画だ。名張市立図書館発行の『江戸川乱歩執筆年譜』（一九九八年）に乱歩の記事の存在は載るが、それが勘三郎との往復書簡であることは示されていない。そこでやや長くなるが全文を引用しておきたい。まずは乱歩の「中村勘三郎さん江」から。

「あなたとは毎月一度以上会つて話をしているので、今更ら手紙を書くのも変なものですが、考えて見ると、ふしぎなことに、三年にわたるおつきあいのあいだに、手紙のやりとりは一度もしたことがない。だから、一度ぐらい手紙を書くのも悪くはないでしよう。

あなたは米吉時代の昔から好きな俳優でした。この頃は芸ではなくて、人柄に惹きつけられていたのです。それが、ふとしたことで、三年ほど前から友達づきあいをするようになつた。会つて見ると、やつぱり好もしい人柄でした。お互に訪問もするし、殊に私の方は芝居の帰りに、あなたの家にお寄りすることが多くて、乱暴な口も利き合う仲なので、芸についても無遠慮な素人評をやるのだが、あなたは怒りもしないで聴いてくれる。

あなたの舞台は、戦後の三越時代から殊に注意して見るようになつた。勘

三郎襲名以来はメキメキと舞台が大きくなり、芸が冴えて来た。新聞の劇評が余りよくないので、気になつていたのが、この一年余りは、それも非常によくなつた。一般の人気も際立つて上昇して来た。私はわがことのように嬉しく思つている。

俳優として芸熱心は当りまえのことながら、この頃のあなたは舞台に情熱をかたむけつくしている。もしほ時代には、それほどでもなかつたと思うが、今では芸に生命をかけている。そばで見ていて実にさわやかな感じです。

昨年度だけを思出して見ても、「お国と五平」「西郷と豚姫」「暗闇の丑松」「獄門帳」など、新らしいもの或いは珍らしいものに、ぶつつかり、悉く成功しているが、あなたは更らにこの方向に一段と進みたい熱意に燃えている。新作の発見に異常の努力をしている。今年こそは、そういうあなたの熱望しているような作品が発見されることを、心から祈るものです。」

互いの家を行き来し、忌憚ない意見も交わす関係がうかがえる。この手紙への返信という形で、誌面には勘三郎の「江戸川先生」が並んだ。

「お手紙有難う御座居ました。

先生からお手紙を戴くのも始めてなら、私が先生にお便りを出すのも本当に始めてです。

先生が良く「旅へ行つた時ぐらいは葉書をくれヨ」等とおつしやるので、旅へ立つ前は今度こそ書こう〳〵と思いながら、忙しさにおわれ、又筆ぶしようの為め、つい〳〵出す事もなく過して居ましたが、こうして筆を取つて見ると、先生とお合いしてからの三年間の、色々な事が思い出されて来ます。始めてお目に掛つた時から、何とも云へない大きな感じを持つ先生を、一ぺんで好きになつてしまいました。お会いし、おつき合いをする様になつてから、先生はかならず十五日の猿若会の日には見に来て下さいますネ。そしていつも先生は、しんけんな顔をして真面目に芝居を見て下さる、幕間になると先生の顔が楽屋へ見えて劇評等を話し合い、それでもしやべりたりず、お忙しい先生にむりを云つて、芝居の帰りに夜のふけるのもわすれて話し込んだ晩が随分有りましたネ。そして或夜はしかられ、或晩はほめられ等して、私は先生より、色々な事を教へられました。ですから今私にとつて月の十五日と云ふ日は、一月中での楽しい日になつてしまいました。

昨年は「西郷と豚姫」「お国と五平」等珍らしいものや新しいものにぶつかつて行けた事を嬉しいと思ひます。今年も良い芝居をしたいと云う心で一ぱいです。私は此の先も一生懸命勉強致しますから先生もどうぞ色々と御指導下さい。」

新作の模索と発見――。これが二人に共通する一九五三年当時の勘三郎の志向であった。勘三郎も乱歩との親交をたのしみ、その人柄や見識、批評眼を信頼していたのだろう。

ところが、一九五五年十一月、勘三郎は大病を患って入院。再起不能ともいわれたが、年を越して退院し、熱海での療養を経て、七月の歌舞伎座で舞台に帰ってきた。乱歩は自らカメラを回して撮影する趣味があったが、当センター所蔵の十六ミリフィルムに、復帰時の勘三郎の姿が残っている。

帝国ホテルで催された勘三郎の全快祝いの会（一九五六年七月一日）に乱歩も出席し、会場の様子を撮影していた。音声のないモノクロ映像だが、大谷竹次郎、七代目坂東三津五郎、三代目中村時蔵、八代目松本幸四郎、七代目尾上梅幸、六代目中村芝雀（四代目時蔵）、初代中村錦之助（萬屋錦之介）、十代目岩井半四郎、三代目市川松蔦（七代目門之助）ら歌舞伎役者の他、初代水谷八重子、榎本健一、久保田万太郎、城昌幸など錚々たる顔ぶれがみえる。

同月の歌舞伎座を訪うた際も、乱歩は楽屋や舞台をフィルムに収めている。『再爰歌舞伎花轢』（『お祭り』）で鳶頭龍吉を勤めた勘三郎の、楽屋での仕度や舞台風景は色鮮やかなカラー映像で、この時代の資料としてきわめて貴重。気心の知れた乱歩がカメラを回していることもあってか、勘三郎の喜びが画面からこぼれ出るようだ。

稀代の探偵小説作家と歌舞伎役者の邂逅は、昭和という時代の豊かな文化交流の一面を浮かびあがらせる。

（本学大衆文化研究センター助教）

歌舞伎座楽屋での乱歩と勘三郎（1956年7月）。大衆文化研究センター所蔵の16ミリフィルム（RF14-7）より